

世田谷パブリックシアター+KERA・MAP #009

キネマと恋人

台本・演出:ケラリーノ・サンドロヴィッチ

妻夫木聡 緒川たまき
ともさかりえ
三上市朗 佐藤誓 橋本淳
尾方宣久 廣川三憲 村岡希美
崎山莉奈 王下貴司 仁科幸 北川結 片山敦郎

映像監修:上田大樹 振付:小野寺修二

音楽:鈴木光介 美術:二村周作 照明:関口裕二 音響:水越佳一 衣装:伊藤佐智子 ヘアメイク:宮内宏明
プロダクション・スーパーバイザー:福澤諭志 舞台監督:森下紀彦 演出助手:相田剛志 プロダクション・マネージャー:勝康隆 プロデューサー:穂坂知恵子

公演日程 2019年7月12日(金)~15日(月・祝) **会場** 名古屋市芸術創造センター

開演	7/12 (金)	13 (土)	14 (日)	15 (月・祝)
13:00		●	●	●
18:00		●	●	
18:30	●			

昭和11年(1936年)、秋。東京から遠く遠く離れた、日本のどこかにある小さな島の小さな港町。この町唯一の映画館では、東京で封切られてから半年遅れて、ようやく新作映画がかかる。今日もスクリーンを見つめるひとりの女性ハルコ(緒川)。同じ映画を何度も鑑賞するハルコに気づいた登場人物・寅蔵(妻夫木)は、あるうことかスクリーンから現実の世界へと飛び出し、彼女を連れ出してしまう。寅蔵を演じた俳優の高木(妻夫木・二役)は騒動を聞きつけ、なんとか寅蔵を映画の中へ戻すべく二人を探し始めるが――。

○客席開場は開演の30分前 ○未就学児はご入場いただけません。 ○開演後は、演出の都合上、本来のお席にご案内できない場合がございます。予め、ご了承ください。 ○公演中止の場合を除き、チケットの変更・払い戻しはいたしません。

チケット発売

一般発売

2019年4月13日(土)

料金【全席指定・税込】

8,500円【税込・全席指定】※未就学児入場不可

チケット取扱い

中京テレビ事業 チケットセンター

☎052-320-9933 <https://cte.jp/>

チケットぴあ: ☎0570-02-9999 (Pコード:491-950)

ローソンチケット: ☎0570-084-004 (Lコード:45004)

柴プレケ92: ☎052-953-0777

e+(イープラス): eplus.jp

名鉄ホールチケットセンター: ☎052-561-7755

名古屋市文化振興事業団チケットガイド: ☎052-249-9387

名古屋市芸術創造センター: ☎052-931-1811

楽天チケット: <http://r-t.jp/>

セブンチケット: <http://7ticket.jp/g/000456>

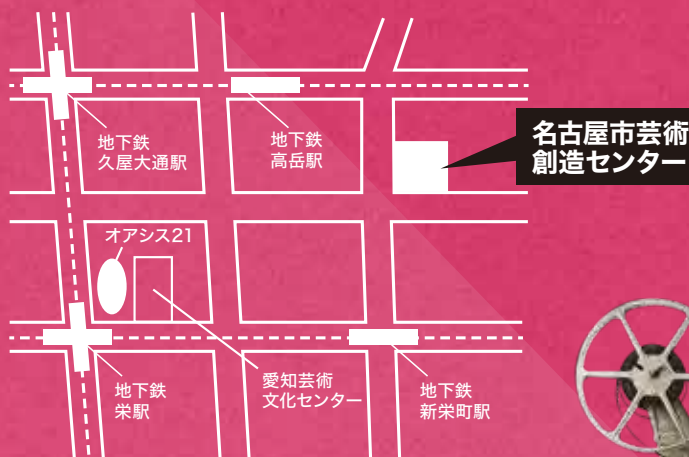
セブン-イレブン、ローソン、ミニストップ、ファミリーマート 店頭

名古屋市芸術創造センター

名古屋市東区葵一丁目3番27号 TEL 052-931-1811

【交通アクセス】

- 地下鉄東山線「新栄町」下車 1番出口より北へ徒歩3分
- 地下鉄桜通線「高岳」下車 3番出口より東へ徒歩5分
- 市バス「布池」下車 南へ徒歩2分(栄12・15号系統、鶴舞11号系統、東巡回系統)
- 市バス「新栄町」下車 北へ徒歩4分(栄12・16号系統、鶴舞11号系統)



ツアー公演

【東京公演】2019年6月8日(土)~23日(日)

【北九州公演】2019年6月28日(金)~30日(日)

【兵庫公演】2019年7月3日(水)~7日(日)

【名古屋公演】2019年7月12日(金)~15日(月・祝)

【盛岡公演】2019年7月20日(土)~21日(日)

【新潟公演】2019年7月26日(金)~28日(日)

世田谷パブリックシアター

北九州芸術劇場 中劇場

兵庫県立芸術文化センター 阪急中ホール

名古屋市芸術創造センター

盛岡劇場 メインホール

りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館・劇場

お問合せ

中京テレビ事業 ☎052-588-4477 <https://cte.jp/> (営業時間/月~金 10:00~17:00 土・日・祝休業)

宣伝美術:はらだなおこ 宣伝写真:西村裕介 宣伝衣装:伊藤佐智子 宣伝ヘアメイク:宮内宏明



世田谷パブリックシアター+KERA・MAP #009

台本・演出:ケラリーノ・サンドロヴィッチ

名古屋市芸術創造センター

2019年7月12日(金)~15日(月・祝)

主催: CHUKYO TV

共催: 名古屋市文化振興事業団 [芸術創造センター]

助成: 文芸春秋

企画制作: 世田谷パブリックシアター キューブ

お問い合わせ: 中京テレビ事業 ☎052-588-4477 (営業時間/月~金 10:00~17:00 土・日・祝休業)



▶ 2016年初演時の劇評より

「舞台芸術の粋を集めての、群を抜いたテクニックの作品。転換に次ぐ転換まで美しく細かく、しかもその上位に役者と物語が常に切なさを伴って存在し続ける。— こんな奇跡を味わえるのはKERAと同時代に生きている者の喜び。」 いうせいこう

「ウディ・アレン監督の映画『カイロの紫のバラ』のストーリーを踏襲しながら本家超えを果たした、可笑しくて淋しくて、可笑しくて感動的で、可笑しくて泣ける、素晴らしい、素晴らしい素晴らしいステージになっている。」 豊崎由美 『悲劇喜劇』2017年5月号

「映画と演劇が蜜月関係を結び、狂騒的な傑作喜劇が生まれた。」 河野孝 産経新聞 2016年11月26日付

「劇作家ケラリーノ・サンドロヴィッチが、お気に入りのウディ・アレン監督の映画『カイロの紫のバラ』の設定を、1930年代半ばの日本の小さな島に置き換えて台本を書き、自ら演出。誰もが愛さずにはられない一本を作った。」 読売新聞 2016年11月29日付より抜粋

(無断転載不可)